

博多遺跡群第 213 次調査現地説明会資料

1. 調査の概要

博多遺跡群は主に中世の港湾都市遺跡として知られており、これまでに 200 回をこえる発掘調査を行っています。今回は今年の 6 月から調査を開始しました。

現在の地表面から約 1.2m 下で窯跡がみつかり、
すやき
窯跡やその周辺から人形や七輪といった素焼の製品
や窯道具などが数多く出土しています。



図 1 博多遺跡群の範囲と今回の調査地点

出典：『中世都市 博多を掘る』
2008

図 2 昭和 20 年代の中ノ子家の位置と調査区の関係
(推定)

出典：『博多 76』 2001

調査をしている敷地の一部は昔「中ノ子家」の地所でした。中ノ子家はこの地で素焼の
くでん
製品をつくっており、同家の口伝によると、1808 年（文化 5 年）に、中ノ子安兵衛・吉兵
衛の親子が素焼人形の製造をはじめたとされています。

明治時代に「博多人形」のブランドを形成した主要な人形師はすべて中ノ子家と師弟関
係を持っており、人形生産技術の普及や人形業界の発展に関して、中ノ子家はとても大き
な役割を果たしていました。（参考文献：『博多人形沿革史』 2001）

2. みつかった窯跡について

今回の調査では、窯跡が6基みつかりました。窯跡はすべて調査地の西側に集中しており、同じ場所で何度もつくり直されたものと考えられます。これらの窯は中ノ子家の陶工たちがつくった窯と考えられます。

残りが良い窯跡の構造を検討した結果、「空吹窯」と呼ばれる円筒形の新窯であったと考えられます。



図3 窯跡発見時（西から）



図4 窯跡の上部を掘った時の状況（南西から）

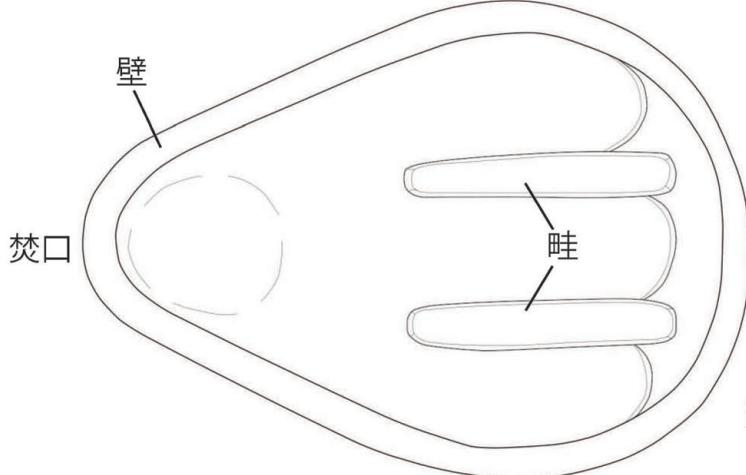


図5 窯跡残存部の平面模式図

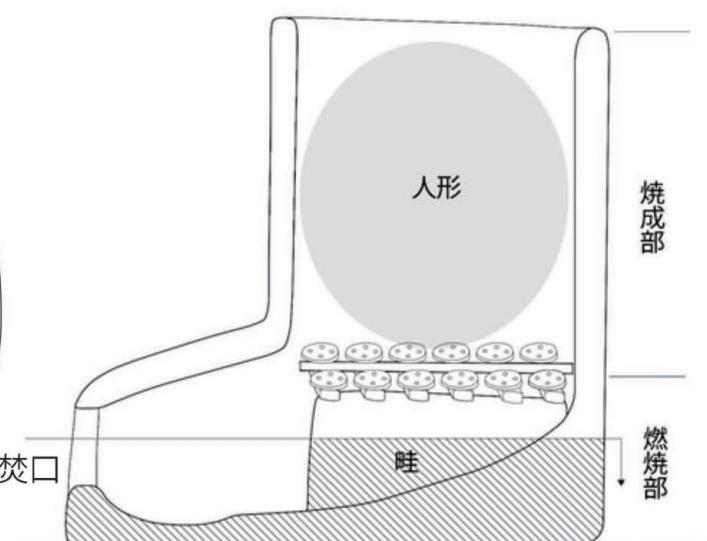


図6 空吹窯の復元模式図
(斜線部が残存する部分)

空吹窯って??

現在は電気・ガス窯が一般的ですが、昭和40年代までは「空吹窯」を用いていました。

今回の調査でみつかった窯跡では、人形などの製品を入れる窯の上半部（「焼成部」という）は残っていませんが、燃料（木材など）を燃やす窯の下部（「燃焼部」）や、燃料の差し入れ口（「焚口」）などが良好な状態で残っていました。燃焼部は土手状の壁（「畦」とよばれる）によって三つに分けられており、床面は焚口から奥に向かって反り上がるよう傾斜がつけてあります。焚口でおこした炎は畦によって三方に広がり、床面の傾斜によって効率良く焼成部へと炎を送ることができたと考えられます。

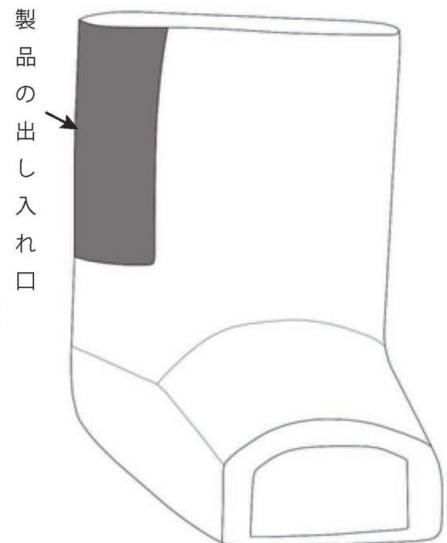


図7 空吹窯のイメージ図



3. 廃棄土坑について

窯跡の周辺では、人形やその型、七輪や火鉢などの素焼製品、そして窯道具などが大量に捨てられた土坑（穴）が多くみつかっています。その出土品から多様な製品がつくられていたことがわかります。

図8 廃棄土坑（西から）

4. みつかった人形について

窯跡の周辺から人形の破片が数多く出土しています。そのほとんどは型押しでつくられた素焼の人形です。型の内側に粘土を押し入れてつくっていたので、人形の裏面には陶工の指紋がはっきりと残っています。出土した人形は、ごく薄く、厚さにむらがないことから、当時の陶工たちの高い技術をうかがうことができます。

また、土でつくられた型も多く出土しており、様々な種類の型がみられます。



図9 素焼人形出土状況（西から）

出土した人形など（縮尺は不同）



型（翁の背面）



型（福助？）



人形の足とその型



型（おはじき）



いけどうろう（箱庭）



人形①手が動くタイプ



人形②座像



人形③頭部



人形④小型
製品 犬



人形⑥ 白い下地が塗られている



人形⑤大型製品 頭部

5. おわりに

今回みつかった窯跡は全て敷地の西側に集中しており、中ノ子家の陶工たちが人形や七輪などの製品を焼いていた窯場^{かまば}と考えられ、出土品から江戸後期～明治初期まで操業されたものと推定されます。今後は出土品の整理等を行っていき、博多の窯業生産についても検討を進めていく予定です。

また、今後の発掘調査はさらに下へ掘り進め、中世、古代、古墳時代など古い時代の調査を進めていきます。